

札幌自由が丘学園スタッフのエッセイ集（2005.10.27～11.23 NO46-60）

46	「わからない」がわからない！？（その4）	杉野建史	2005.10.27
47	布団の中のチーズケーキ」	新藤 理	2005.10.28
48	道を切り開く者」	金澤拓紀	2005.11.1
49	回想	田房絢子	2005.11.2
50	冬が来る」（その1）	杉野建史	2005.11.3
51	開校記念日	亀貝一義	2005.11.05
52	回想	田房絢子	2005.11.6
53	制服	芳賀 慈	2005.11.08
54	リンダリンダリンダ（美しい、美しい、美しい、の意）	新藤 理	2005.11.11
55	「手紙」 その1	畑中紀世彦	2005.11.12
56	「コレというもの」	金澤拓紀	2005.11.16
57	「冬が来る」（その2）	杉野建史	2005.11.18
58	「冬が来る」（その3）	杉野建史	2005.11.19
59	親愛なる 悩める迷える子羊へ。	田房絢子	2005.11.20
60	「自分に合った学校」を選ぶ	亀貝一義	2005.11.23

46 「わからない」がわからない！？（その4） 杉野建史 2005.10.27

子どもが「なぜ」を持つために、「これが“なぜ”だよ。これが“不思議”でしょう！」を与えることが第一歩で、「これを不思議と思いなさい」という指導方法は間違えではないのだろうか。

担当している授業では「この時間は、普段使わない脳の部分を使おう」と声をかけながら、何とか生徒全員が頭を抱える時間を確保するように心がけている。普段の学園の生活では、1つの問いかけに対する答えは1つでないことが多い。答えが1つしかない「問題」は多くないのかもしれない。しかしこれからの生活の中で、1つの「答え」を求める、また求められることが必ずある。選択を迫られる場合、多くの選択肢の中から否が応でも1つの選択をしなければならないケースは多分に考えられるのである。判断をするための材料（多種多様な体験）が必要で、判断方法（多面的な考え方）が身に付いていなければ適切な結論を出すことはできない。

脳への刺激は脳を動かすことだけではないことが今日の医学により証明されている。手（指先）を動かすことも脳への良い刺激になる。今の子どもは多くは手先が器用ではない。器用でない子どもが多い。学園の生徒も例外ではない。その昔、ルソーという哲学者が“手工”の重要性を説いた。その重要性を私も強く感じる。学生時代の恩師に「ものづくり」の大切さを教わった。物作りをすることは前段階での設計が重要になる。設計にはその前段階での思考が重要である。思考の中にアイデアが必要になる。学生時代の7年間はハードとソフトの両方を造ることに費やした。頭を使わなければ前に進まないし、手を動かさなければ何もできない。そんな環境が幸せにも私を育ててくれたのだと

思う。私も努力した。そのことは私の大きな財産である。

子どもを取り巻く環境を少しでも変化させること。教師には第一に授業がある。休み時間がある。放課後もある。できないことはない。考えなければ、手を動かさなければ進まない。何にもできない。そんな環境を用意したい。学園だけではできないこと。保護者の皆様にも是非是非ご理解とご協力をお願いいたします。

「わからない」は恥ずかしくない！

47 「布団の中のチーズケーキ」

新藤 理

2005.10.28

少し前の話だけど、生徒たちの進路指導のために特別授業を行ったことがあった。慈さんが作ったプリントの最後に設けられた質問は「布団の中で想うことは何ですか？」。静かな夜にひとり、何となく想像する未来の自分の姿を大切にしなさい、ということだ。慈さんの話は面白いなぁと感心しながら、思い出していた。布団の中で想い続けたあの場面。

小学4年生のころ、突然「大人になったら作曲家になる！」と宣言したことがあった。いところからピアノ名曲集のカセットをもらったからという単純な理由からだったが、小学4年生のオサム君は本気だったのだ。親を説得してピアノ教室に通い始め、第1回のお稽古でとられたアンケートの「通い始めたきっかけ」という欄では、「その他」に をつけて「作曲家になりたいから」と書いた。

布団に入るといつも同じことを考えていた。大人になった自分。当時まだ目新しかったフローリング張りの広々とした部屋（自宅兼スタジオ）でグランドピアノに向かい、五線譜を塗りつぶしていく自分。作曲の仕事がはかどるあまり、時間がたつのも忘れていられるらしい。そこへコーヒーと手作りのチーズケーキを持った可愛らしい奥さん。「あんまり根をつめすぎると、身体に毒よ...」と微笑む。どれ、ひと休みするかな。今夜は長い勝負になるはず...

笑えば笑え。オサム君は本気だったのだ。たとえそのころ、可愛くてピアノの上手な女の子が転校してきたという重要背景があったにしても。

あれから十数年。オサム君は作曲家ではなく、フリースクールのスタッフになった。小学4年生時分では知るはずもなかった職業だ。あれやこれやに追われつつ、そういえば音楽の授業では自らアレンジした楽譜を使い、生徒たちと楽しくやっている。開校10周年の時には、自主制作映画のサウンドトラックをパソコンで作曲した。いや、もっとさかのぼれば、ボランティアスタッフとして関わり始めたかどうかという時、演劇公演で挿入する音楽を突貫工事で完成させて持っていったのが、札幌自由が丘学園と歩む人生のスタートだったのだ。ある日、慈さんに「小学生のころは作曲家になりたかったんですよね」と話すと、「ほとんど叶ってるじゃないですか」と言われた。

布団の中で想うこと。それを成し遂げたいなら、ぬくぬくと眠っているだけではどうにもならないに決まっている。少年オサム君も、その後は到底ここに書ききれない道を辿っていくことになる。でも、その道行きのエネルギーとなるのは、きっと枕の上あたりにポツカリと浮かぶ1シーンのはず。それが証拠に、作曲家になったわけでもないのに、布団の中で想い描いたあの夢は、「ほとんど叶えた」つもりでふり返ることができる。笑えば笑え。大人になったオサム君は、本気である日の自分に今の姿を自慢してやりたいと思うことがあるのだ。たとえ、そこにフローリングの自宅兼スタジオや手作りのチーズケーキはなかったとしても。

自由が丘のスタッフには、二度目の大学生活(通信制)を送っている者がいることをご存じだろうか。かくいう私も5年前からレポート提出に苦しんでいる一人である。十年前に取得したのは工学士(理系)の資格であったが、現在は文学部史学科(学科再編により今は人文学科となっている)の「地域文化」というコースを専攻中だ。

他のコースに比べて学費が安かったのと、何となく面白そうだからという理由で、このコースを専攻したのだが、ふと気が付けば、「民俗学」なるものに心惹かれるようになっていた。

「民俗学」という言葉を聞いて、すぐに「柳田国男」の名前を連想される方はどれくらいおられるだろうか。「民俗学」という言葉自体初めて聞いたとおっしゃる方もいるのではないだろうか。

「遠野物語」などで知られる柳田国男は、最初文学に志し、詩集を作ったり短歌の投稿をしたりして、森鷗外・田山花袋・尾崎紅葉らと交流していたが、明治41年の夏、九州・四国を旅行した際に、宮崎県の秘境・椎葉(しいば)村に一週間ほど滞在し、村長の中瀬淳氏から古い伝承を聞いて、こういう世界に興味を持つようになった。

以後、昔話研究会や方言研究会、民俗学研究会などを設立して、全国の昔話を収集したり、各地で民俗学の講座を開いたりするとともに、日本の民俗学の創始者として後世に名を残すこととなる。現在に伝わる知識や技術、研究内容を対象として学んでいくことは、「学問の修め方」の一つであり、これだけの情報が溢れるようになった現在においては、そうした既成の「智恵」を身に付けていくことすらなかなか時間のかかる作業ではあるのだが、それだけでは「学問」の世界が広がっていくことはない。

それまで人が踏み込むことのなかった未知なる領域を行こうとする者が現れることによって、人類の「智恵」という財産が広がりや深みを持つようになることは言うまでもないだろう。

今、自由が丘学園が文科省からの委託を受けて取り組んでいる教育の諸問題もまさにそうした領域なのではないかとふと感じることがある。これまでに積み重ねられてきた「智恵」を土台に、更なる試行錯誤を展開していくことによって、今までにはなかった新たな「智恵」が生み出されようとしている側面が少なからずあるのではないだろうか。

文科省から「不登校への対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業」の委託を受けた全国15の団体(自由が丘を含む)による事業報告が、今年と来年にかけて出てくることになるであろうが、どんな新たな「智恵」が生み出されることとなるのか、各団体の動きに注目していきたいと思っている。

今朝、窓の外を見ると煙が立ち上っていた。父親が簡易式の薪ストーブを買ってきたらしい。そんな煙をみていたら、ふと思い出したことがあった。

高校卒業後、留学するために専門学校で英語の勉強をしていた。1年後に先輩達が一足先にアメリカへ旅立った。まだ飛び出せずにいる自分がイヤになり、一日も早く日本から逃げ出したかった。その半年後、遂にアメリカ行きの片道切符を手に入れ、一人旅立った私を待っていたものは・・・そう、ホームシック!その存在を知ってはいたものの、自分には縁遠いものだと思っていた。両親には「しばらく帰ってこないよ」「絶対卒業して帰ってくる」などと豪語していたにもかかわらず、あっさりと陥ってしまった・・・。そんな弱い自分に、現実、打ちのめされた日々があった。

そんなある日、暖炉の前にいた私にホストファザーが、「なにが楽しくてずっと火を眺めているんだ？」と聞いてきた。火を眺めて深く考え事をしていたらしい。ん？この台詞、どこかで聞いたことがある。そう、自分が父に言った台詞だ。うちの父は休みの日となると、庭でたき火をして、なにか考え事をしたり、自分だけの時間をそこでゆっくりと過ごすのが好きなのだ。私は半ばシラケ気味に「なにが楽しいの？」と聞いたことがあった。暖炉の前で火を眺めている自分に、父の姿が重なった。こういう気持ちだったのか、と。

その夜、生まれて初めて父に手紙を書いた。「火をゆっくりと見ている気持ちがわかった気がする」と。ホームシックにかかっていたせいもあって、自分の気持ちを正直に綴った手紙だった。なんとなくいつも反抗的な娘だったけど、親元を離れて生活してわかったいろんなこと。素直に思いのまま、書いてみた。

あの手紙を父は憶えているだろうか。結婚式で読むような両親への手紙よりも、私にとっては重みがあるかもしれない。今は恥ずかしすぎて、読めはしないだろうけど・・・。

50 「冬が来る」(その1) 杉野建史 2005.11.3

「子どもはかぜの子、元気の子」。北海道に冬が近づいている。先日、手稲山の初冠雪が報じられた。私にとって待ち遠しい季節がすぐそこまでやって来ている。

その昔、冬のおやつといえば蜜柑だった。私は蜜柑が大好きで日に10個は食べていたように記憶している。学校から帰ったらまず蜜柑。食事の前に蜜柑。寝る前にも蜜柑。おかげで手足は黄色になってしまった。友達と比べてもはるかに蜜柑色な手足だった。

我が家は“おかし”を常時おいている家ではなかった。私は、ガムなどは小学校の6年生になるまで食べたことがなかったし、コーラなどの炭酸飲料もほとんど飲んだことがない“野生児？”だった。小学校に入学する前、5歳の頃だったと思う。休日に家の周りで遊んでいると、近所のこどもの口が微かに動き続けていることに気がついた。何を入れているのか解らなかったが、何か美味しそうなものを口に入れているだろうと想像し、微かに動き続けているのがうらやましかった。急いで家に帰り、口に入れることのできる適当な大きさの食料を探した。勿論ガムはなかったし、あめ玉も置いているような家ではなかったので、困った。そのとき目に入ったのは“うめぼし”。梅干しを口に入れて、元気よく外へ戻った。しかし、いつもまでも口に入れておけるはずもなく、すぐさま家に帰りもう一つ口へ放り込む。そんなことを何回も繰り返すうちに子どもながらに気づいた。「みんなが口に入れているのは、うめぼしじゃない！！」あめ玉は母から1つ口に入れてもらうもので、好きなようにいつでも食べられる“おかし”ではなかった。

冬になり蜜柑が店前に山積みになると思い出す。

冬は好きな季節で興奮する。夏も好きな季節で興奮する。はっきりとした季節が好きらしい。ということ国語担当の木村先生に話すと「春や秋のような季節にも情緒があるのですよ～」と笑われた。私の中では春や秋は「合間の季節」というように位置付いている。変な表現だ。はっきりとした季節になるまでの季節はなんだか落ち着かない。

51 開校記念日 亀貝一義 2005.11.05

今日11月4日(金)は「開校記念日」で休校である。本当は11月1日。札幌市内の学校で11月

1日を「開校記念日」にしている所は少なくない。
少々自由が丘スタートのころを記しておこう。詳細は「あるフリースクールの10年」にあるのでそこも参照して欲しいのだが。

1993年2月ころから、「フリースクールをつくる」ことが私たちグループの計画になった。このグループというのは、86年4月から進めてきた研究会である。現在のスタッフでいえば、吉田弘さんや木村玲子さんと私である。月寒スクールの鈴木秀一さんは、全体の代表委員だった。いろいろ議論・検討してオープンしたフリースクールは「学校の基準に至らない」のではあるが、ここを求めてきた子どもたちにとって大事な居場所であり学びの場、すなわちまぎれもなく「重要な意味のある学校」であった。

11月1日(月)6名の生徒からスタートした学園はどんどん生徒数が増えてきた。いろいろな経過があったが、現在の地に移ったのは02年8月のことである。フリースクール札幌自由が丘学園は、今高等部をあわせもつ全国的にも大いに注目されるスクールになっている(と思う)。私を感じる札幌自由が丘のきわめて大きな特徴は、ここにはせ参じるスタッフがひとりひとり『どこにいても恥ずかしくない優れた人』であるということだ。スタート以来多くの方がたが関わってくれた。すでに鬼籍にある人(亡くなった人)もいる。

自由が丘の歴史を思ったとき常に第一番の位置にある柴田宏樹さんもそうである。またフリースクール開校式の時に、遠く厚木からメロディを伴った祝電を送ってくれた亡き藤田喜一さん(元札幌北斗高校長)も忘れることができない一人だ。

現在、文科省から「不登校対応の教育研究の委託」を受けているが、私は何度もいうのだが、私たちの教育実践は「不登校対応の教育」の意義をもちながら、学校と教育の全体に通じる本質に迫るものとしての意義をもっているはずだ。この記念日にあたって更にその趣旨を深めたい。過去と今日の多くの教師スタッフと進める共同の事業である。

52 回想 田房絢子(高等部2年担任/英語担当) 2005.11.6

私は数字が苦手だ。それなりに算数や数学の問題が解けるにしても、数字自体に少し抵抗を感じることは否めない。昔から本が好きだったせいか、文字のほうが頭に入りやすい。だからといって文章題が得意と聞かれたら、それはまた別の話で。

ところが大学に入って、一般教養では数学が必修科目だった。予想していたとはいえ、苦手な数学をこれまた母国語でない英語で学ぶなんて!!心は不安で不安でたまらなかったけど、足は履修登録へと向かわざるをえなかった。

これまたところが、いざ授業に出てみると楽しくて楽しくてたまらない。「英語では数学をこうやって勉強するのかぁ」とか「英語で問題を出すと、こういう言い方になるんだぁ」などといった、ちいさな発見たちが私を学習へと誘ってくれたのである。私にしてみたら の授業と言うよりも、まず全てが英語の授業になっているので、好きな英語で学ぶ分には一向に苦にならなかったわけである。あれだけ不得意としていた数学をおもしろいと感じる自分が嬉しかったし、新鮮だった。それに簡単ではあっても(一般にアメリカの大学で必修科目とされている数学は日本の高校の基礎の基礎くらい。)解けるという事実は、私を更なる学習へと導いてくれるモチベーションへと変わっていった。この一連の流れはまさに stimulus(刺激) response(反応)。心理学の基礎知識である。当たり前のことだけど、内外部からの刺激はなんらかの反応へと繋がっていて、それがまた刺激となり反応とな

る。人間ってこうやって動いているんだなぁと身をもって学んだ心理学専攻田房絢子は、夜な夜な「おもしろいおもしろい」とニヤニヤしながら勉強していた。

学生時代はいっぱい勉強した。勉強している自分が好きだったりもした。これもまた stimulus & response の輪。なんて、過ごしていた日々を思い出しながら、今だって勉強しなくちゃならないんだからと自分に喝をいれつつ・・・。

53 制服 芳賀 慈 2005.11.08

学園を見学に来た人から、不思議そうに尋ねられることがある。「制服の生徒さんがいますね。私服で良いのに制服なんですか?」。私は答える。「制服もいますし、なんちゃって制服もいます」。見学の子は「ああ」と頷き、保護者は「?」という顔をする。

自分たちのころから比べて、今時の制服は各段にかわいらしい。私だってあんなカッコで中学生を送りたかったと本気で思う。忘れられないのは修学旅行の前の学年集会。先生が「修学旅行はスカート禁止」とのたまわったのである。当時の制服の「ズボン」はオバさん臭い紺のストレートで、上着とのバランスも悪い。当然私たちは「何でえ??!!」ということになる。先生の説明はこうだった。「旅行中は活動的な服装が一番。先輩たちも旅行から帰ってくるとみんなズボンで良かった、と言っているよ」。

私たちは、ぶつぶつ言いながら札幌で自主研修し、函館山の夜景を眺めた。どこに行っても同じような中学生に会ったが、自分のところの制服が一番格好悪かった。

かくて旅行を終えた学年集会で、私たちは口を揃えて言ったのである。「やっぱりズボンで良かった。来年もそう伝えて!」。だって、自分たちの代で変な格好が終わるなんて悔しかったから。

54 リンダリンダリンダ(美しい、美しい、美しい、の意) 新藤 理 2005.11.11

「映画通」を自認できるほどではないけれど、筆者はなかなかの「映画ファン」。1997年には、年間に観た映画の本数60本という記録も作った。レンタルビデオは含まずに、である。

もっとも、最近ではめっきり映画鑑賞にかかる時間も無くなってしまった。新作映画にもいまいち耳疎く、これでは「もと映画ファン」と呼ばれても仕方がない。学生時代足しげく通った名画館・「蠍座」が学園のすぐ近くにあるのに、いつも行き帰りに素通りするばかりなのが寂しい限りだ。かくて年間にせいぜい3~4本になってしまった鑑賞ペースだけど、それでも最近、久々の大当たりに出会った。山下淳弘監督の「リンダリンダリンダ」。

主役は4人のロックバンド。舞台は学園祭の準備でにぎわう高校。軽音楽部でバンドを組んでいた女子グループでケンカが起こり、ボーカルが脱退してしまう。残りのメンバーが代役として白羽の矢を立てたのは、韓国からの留学生。選んだ曲は、懐かしの「ザ・ブルーハーツ」のナンバーだった。お決まりといえばお決まりの青春劇を彼女たちは生きる。限られた時間のなか、日本語の歌詞を覚えるところから始まる留学生のボーカル。深夜の部屋に忍び込んでの猛特訓では、先生に見つからないようヒソヒソ声で歌い、ドラム代わりに座布団をたたく。誰もいない体育館のステージで、明日の学園祭を思い描いて、愛情いっぱいメンバー紹介の練習を試みる。模擬店とのかけ持ちの忙しさで、練習に遅刻して険悪になったり。男の子に告白したり、男の子に告白されたり、だるくなったり、気合いを入れたり、寝坊したり。

ありきたりのはずの姿が、凡百の青春映画とは比べようもないほどリアルなのだ。無理もない。この映画が目指したのは、誰もが通ってきたあの時間を匂いごと切り取ること、それだけだからだ。他にはほぼ何も目指していない。それは、かつて一番近くにあったはずの世界。でもそれを映画として再生させる作業の、いかに細なるセンスが要求されることか。

進路指導室で「リングリング」の楽譜をコピーしてメンバーのみんなに配る。みんなは楽譜を凝視しながら歩き始める。おそらく、見た目にはわからない程度に小鼻をふくらませて。気の利いたセリフはない。笑顔もない。眼だけがぎらぎらと光っている。これが、私たちの心も体も差し込む世界の入り口なのか。できるのか私たちに。眼だけがしゃべっている。

ああこの場面を知っている、と思った。それは例えばいつかの自分。いつかの仲間。そして、例えば演劇に音楽に、学園祭に、ときにはとっとするほどひたむきな姿を見せる、自由が丘の生徒たちの姿。余計な気持ちのぶれがなくなり、ただ自分を取り巻く世界が急にリアルに感じられるそんな時だけ、私たちはドブネズミみたいに美しくなれる。

余談だが、先日行われた父母&スタッフ懇親会の後、F S部スタッフの某H中氏は、カラオケ屋さんの机の上へのぼり、「リングリング」を熱唱（絶叫）していた。すぐそばで飲み物がこぼれたけど、靴下で拭きながら歌い続けてたっけ。あの姿もまた、ドブネズミみたいに...!?

55 「手紙」 その1 畑中紀世彦 2005.11.12

先日届いた手紙。大学を卒業してから7年半の間に、50 通くらいは受け取っただろう見慣れた茶封筒。またか、と思いつつ差出人を見ると、やはり「N大学S学部体育部連盟籠球部」と書いてあった。開封すると、堅苦しい挨拶と納会の知らせ、そしていつもと同様に出欠の返信用ハガキが一枚同封されていた。

大学時代、私はN大学S学部の体育会バスケット部に4年間所属していた。大学の体育会といえば、ご承知の通り規律が厳しく、特に上下関係が重んじられるのだが、我が母校N大学の体育会は平成のこの時代とは思えないほどの封建社会だった。その厳しくも滑稽な出来事を、この茶封筒が送られてくると思い出す。特に、一番最初に味わった新歓のことは忘れられない思い出だ。

新入生で入学すると、まず『新入生歓迎会』（略して『新歓』）という行事がある。我が校の新歓は、5月のとある土曜日に料亭の宴会場で行われる。そこで部活の先生やコーチ、卒業生を含む先輩たち、そして各体育部の運営を取り仕切っている体育部連盟執行部（大学4年生でその風貌は長ランにドカン、下駄を履き、髪型は短髪かオールバック）に対して面通しをするというものだ。その日のために新入生は、入部するとまずその新歓の練習を昼休みの約1時間、部活前の30分、そして部活後に30分練習をする。

最初は挨拶と礼の練習。当日、先生や先輩達が料亭に到着する際、新入生は挨拶をして招かねばならない。宴会の1時間前から料亭の外に1列でビシッと並び、まだ顔も見たことのない先輩達と思われる人が列の前を通過すると、「オス！！失礼します！！」と揃って怒鳴り声に近い大声で挨拶をし、揃って礼をする。この練習が、しばらくの間ひたすら行われるのだ。この練習で退部していく部員が毎年数名いる。 続く

56 「コレというもの」 金澤拓紀 2005.11.16

私が小学生のとき、現在の週休2日制とは違い、土曜日は午前授業だった。午後の練習のために弁当

を食べ始めた野球部の同級生を見ていて、自分も野球部に入ろうと思った。小さい頃から父親とキャッチボールはよくやっていたが、部活に入って野球をやりたいと思ったことはそれまでに一度もなかった。給食では味わうことのできなかつた「のり弁」への憧れが、6年生になろうとしていた私を野球部へと導いた。

中学に入ってからバレーボールを始めた。春の高校バレーで、私の出身である青森県の代表チームがあっけなく負けたシーンをテレビで見たのがきっかけだった。優勝経験を含め、全国でも強豪校といわれていた「弘前工業」を「高校生になったら俺が復活してみせる！」と勢い込んで入部したものの、新入部員は私一人だけであった。市内の大会で優勝していた先輩たちに比べ、自分たちの代では1回戦を突破することもできなかった。

高校に入学した際は一応バレー部の見学をしたものの(上記の「弘前工業」ではなかった)、あるマンガの影響を受けて弓道部に入部した。大学のときも何度か弓道部を見学しておきながら、結局はある映画の影響を受けて「儀仗隊(ぎじょうたい)」なるものに所属した。

今こうして振り返ってみても、何かを始めようと思ったきっかけは些細なものばかりであった気がする。中学時代、バレー部の練習試合で他校へ遠征する際に、通り過ぎる車をチラリと見ては、「おっ、だ！」と聞いたこともないような車の名前を言い当てて騒いでいる先輩たちの様子を見て心底羨ましいと思った。「コレ」と思えるような熱中できるものが自分の中になく、ずっと感じ続けていた。

何か打ち込めるものを持っている人と出会ったときに、「スゴいなあ」と感心してしまう癖は今も変わらないが、「憧れ」や「羨ましい」という感覚ではなくなってきたような気がする。「コレ」と思えるものに出会った経験が少なかった(と自分では思っている)分、勉強や運動、遊び、部活、アルバイト、恋愛と色々なものに体当たりし、途中半端に止めることだけはしなかったつもりだ。自分の中にあつた最低限のこだわりだったのかも知れない。

今でも「趣味」を聞かれるとちょっと戸惑う。一頃、「将棋」や「旅行」、「ランニング」にハマっていたことがあり、敢えてということであればそれらを答えるようにしているが、今ではどれも遠ざかっているものばかりだ。「無趣味だよなあ」と自分を嘆きたくなることもあるが、色々なことにチャレンジしてみようという気持ちだけはこれからも忘れないようにしていきたいと思う。たとえこの先、「コレというもの」に出会えなかつたとしても、好奇心を失うことだけは決してしたくないから。

57 「冬が来る」(その2) 杉野建史 2005.11.18

北海道のすぐそこにまで冬がやってきた。とうとう札幌の平地にも雪が降つた。手稲山はもう白い部分がたくさんになった。この季節になると私の心は常に興奮している。スキーが早くしたい!の一心である。

しかし、目の前には進路に悩む子羊がたくさんいる。私は1年生を担当しているが、進路指導はスタッフ全員で取り組むことにしている。3年生担任のK澤氏は毎日のように頭を抱えている。本当に全力で取り組んでいると思う。子羊たちはというと、10月初旬に早々と進路が決まつた者。年明けの大学入試に向けて勉強に必死に取り組む者。少し先の将来についてまだ考えられない者。考えてはいるがなかなか自分の進路を明確にできない者。様々だ。

高校の進路指導もなかなか難しい。高校までが義務教育のようになっている(準義務化?) 現在では高校卒業が義務教育終了と思う。もう少しで義務教育を終了する子羊に、少し先の未来について本気

で考えることを促すときに忘れてはいけないスパイスがある。「夢や希望」だ。少し先の未来は具体的に考えることが重要であるし、その先に「夢や希望」があることが考える際の力になるはずである。生きる力には夢や希望を実現するための進路や方法を考え実行する力が含まれていると強く思う。すべてを子羊の力で見つけることは容易なことではない。だから私たちをおおいに利用してほしい。私たちは「ともに！」の精神をいつでも持っている。保護者の方々も巻き込みながら「ともに！」の精神である。ともに探したいし悩みたい。納得いくまでともに作業した後、自分で決めてほしい。ここからは自分一人だ。

私の進路決定は2転3転した。志望大学に私の学力が全く伴っていなかった。本気になって勉強に取り組んだのは19歳になってからだった。筋金入りの浪人（侍崩れではない！）になった。その昔、私が進路を決定するときに「ともに！」をしてくれたのは父と母だった。少しばかり本気になって勉強していた私にコーヒーを必ず入れてくれたのは父だった。初冬、父の口癖は「おまえどうするんだ～？」だった。返した言葉は「考えてる～」だった。本当に考えていたのか今となってはかなり怪しい。

そんな冬がすぐそこまでやってきている。

58 「冬が来る」(その3) 杉野建史

2005.11.19

北海道に冬到来。自転車に乗る手がかじかむ寒さだ。でも、雪を見ると心が弾む。雪が好きだ。雪山が好きだ。北海道の冬にバンザイ！

2年前、大好きな自動車を手放した。大学時代から自動車に興味を持ち始め、大学の先輩にいろいろ教えてもらった。部品を買ってきて自分でいろいろいじったりもした。ライセンスを取り、ロールバー（車内に張り巡らすジャングルジム）を付けてJAF公認の競技にも出場した。成績は言うまでもなく散々なものだった。でも、自動車をいじる楽しさを十分に味わった（違法改造は一切していないことを強調しておく）。大学の研究室も“機械研究室（通称「機械研」）”に所属した。

そんな私が車を手放すきっかけは「健康維持・体力低下阻止」だった。しかし、生徒には「地球の環境を考えて...」とか「現代の車社会を...」などと言ったと思う。車を手放す際にいろいろと維持費について計算した。1年間にかかる費用は馬鹿にならなかった。そのことを自分に言いように解釈し、自転車を購入した。通勤用スーパーマウンテンバイク。購入する前はそれほど気にならなかった自転車が、いやに気になり始めた。雑誌を数冊購入し研究した。気になる部分は“メカニカル”な部分だ。フレームの材質、変速機の機構、ブレーキ、タイヤなどなど。予算と相談して納得いく1台を購入したのだ。

それが...。2年間使っただけで盗難にあった。あるはずの場所に愛車がない。「今日は自転車に乗ってこなかったんだっただけかな...」と自分の記憶を疑ったりした。

我が家から学園までは、公共交通機関を利用して1時間。自転車を利用すると30分弱である。自転車はかなり強力な相棒だった。相棒を失った後、2年間で元（公共交通機関を使用したときに発生する費用）が取れたかを計算してみた。元は十分に取れていた。自分を落ち着かせた。警察に被害届は出していたが1ヶ月して2代目の相棒を購入した。典型的な消費型人間かもと反省した。以前よりも吟味に吟味を重ねた。こだわりにこだわった。あらゆる面にこだわって研究した。納得いく1台を探し当てた。大学時代の勉強がまさに私の趣味の中核をなしている。今年の自転車通勤が終わる。

自動車を離れるといろいろなことが見えてくる。多くの危険が見えてくる。歩行者と自転車と自動車の関係。交通事故問題。環境問題。消費型社会の問題。かなり深刻な問題である。

59 親愛なる 悩める迷える子羊へ。 田房絢子 2005.11.20

マイペース」という言葉を聞いてなにを連想する？もしどんな時でも、どこにいても、誰と一緒にいても、マイペースを固持するのであれば、わがまま・自分勝手と受け止められるよね。でも、いつでもマイペースを保つことができるとなると、ちょっと違うって思うんだけど。

世の中にはいろんな人がいるよね。そう、世の中はたくさんの人との巡り会いでできています。楽しいことも嬉しいこともいっぱいあるけど、それだけじゃない。世の中のみんなが味方であるはずはなくて、辛いこともいっぱいある。楽しい中にだって、苦い発見や変化があったりする。そして自分がいる環境はそんなに簡単に変えられない。そんな中で、自分を押し込めすぎたり、流されたりして、相手に合わせているだけじゃ、きっと落ち込んでしまうことになるよね。だから自分のペースを保ちつつ、相手と付き合っていくってことが大事なんじゃないかなと思うんだ。そこで自分を見つけること。そこで自分の過ごし方を見つけること。ただ、これは「自分が自分が」って主張するわけじゃない。そこでの自分のあり方だよ。相手も人間。いろんな考えや思いがあるわけだしね。自分もいるけど、相手のことも考えなくちゃならない。でも、当たり前だけど人間関係って、相手がいて初めて成り立つものだから。

つつい自分だけの視点で考えがちで、「イヤイヤ」って一回思ったら、どんどんイヤになっちゃう。でも自分と相手、両方のことを考えることができたなら、もうちょっとうまく過ごせる気がしない？どんなに大好きな友達でも一緒にいたくない時だってあるし、どんなに好きな恋人がいたって、「ちょっとなんなのよ。」「ちょっと一人にしてよ。」って思うこと、きっとあるよね。でも山あり谷ありうまくやっているでしょ？人との付き合いって、どこでも一緒だと思う。自分が自分であるために必要なことや過ごし方って、人それぞれ違って、絶対あるよね。それを大切にしながらの人間関係。そうすれば、誰とでももっと力を抜いて楽しんでいけると思うんだ。いい意味での「マイペース」って本当に強いよ。

そんな簡単に言わないでよって？そうだよ。でも、これが私の考え方ですということをお伝えしたのです。確かに簡単にできることでも考えられるものでもないけど、そう思い始めること、そんな考え方もあるんだなって知ることが、また新たな自分の始まりや解決への糸口になるんじゃないかな。

私が出会った大切な人へ。「自分なんて必要ないから、どっかいったらいいんだ。」なんて、とっても悲しいから絶対思わないでね。

60 「自分に合った学校」を選ぶ 亀貝一義 2005.11.23

私たちの学園は、関心をもつ人たちに対して、必ず1日以上体験入学を経験してもらうことにしている。その上で、入学したいかどうかを考えてもらい、私たちの方でも受け入れることができるかどうかを判断する。

それは、学園での授業も実際がどうなのか、クラスメートになる人はどういう人か、教師はよさそうか、などをしっかり観てもらうことが不可欠だという趣旨である。体験入学をしっかり保障できないような学校ではダメだと思う。

だから、入学してから「こんなはずではなかった」と嘆く生徒はいない。校舎も施設も不十分である

ことは誰もが知っている。しかし同時に、学校というのは建物や施設で決まらないのだ、ということも誰もが分かっている。

今いるほとんどの子どもたちの心の優しさと明るさは、新しく不安をもっている生徒には大きな励ましになったり、貴重なメッセージになっているようである。

先日、高等部の父母会があり、最近わが学園に転校してきた生徒の両親がそろって話しをしていた。「この学校に入ってからは見違えるほど子どもが元気になり明るくなりました。親としてこんなうれしいことはありません」と。

それぞれに合った学校というのがある。「学校」に合わせて人格がきまるのではなく、一人ひとりの個性に合わせて学校を選ぶ時代になってきたのではないかと痛感する。フリースクールであっても高等部であっても学校選択の意義は同じではないだろうか。